

書評

グローバリゼーションと感情の政治学 ～苅部直『歴史という皮膚』

宇野重規

1 論文集の性質

本書は、これまで著者が執筆した論文のうち、政治思想史に関する考察を集めたものである。論文の初出は、1991年から2009年までと20年近い幅があるため、当然のことながら、その間の著者の関心の変化が予想される。実際、論文で取り上げられている思想家や学者は、横井小楠、元田永孚からはじまって、福沢諭吉、吉野作造、南原繁、丸山眞男など実に多様である。尾高朝雄や中村哲についての貴重な論考も含まれる。

主題からいうと、近代日本のナショナリズムと天皇論が、諸論文を貫くゆるやかな共通テーマになっているが、必ずしもすべてがこの二つの論点に収斂するわけではない。むしろ近代日本の思想のうち、これまで十分に光の投げかけられてこなかった多様な側面に、思想史の手法によって著者が一つひとつアプローチしていく過程を追体験することが、本書をひもどくものにとっては大きな醍醐味となるであろう。

その意味からいえば、本書は一つの見通しの下に執筆されたものではない。にもかかわらず、本書を構成する諸論文には共通の関心傾向が認められる。この書評では、そのような関心傾向を二点にしばって論じていくが、それに先立って本のタイトルについて一言しておきたい。著者が選んだのは『歴史という皮膚』である。田村隆一の詩からとった言葉だという。「切ったら血が出る『皮膚』が「歴史」の形容に使われているところが気に入った」（あとがき）とは著者の言葉であるが、これは何を意味するのだろうか。

一つには、文字通り、思想を理解するにあたって、その思想が展開した歴史的背景の知識が不可欠であり、歴史的な脈抜きに思想を読むことに等しい、という考えであろう。思想と歴史は切り離すことはできず、無理やり切り離せば、思想という生物は死んでしまう。

しかしながら、他面において、著者はまったく歴史的な脈を異にする思想家たちの問題意識が、意外なほど連続していることを強調しているようにも見える。そうだとすれば、歴史という重い拘束物を脱ぎ捨て（それが容易なことではないにせよ）、思想の自由な連想・展開を肯定することが、この表題の趣旨となろう。著者は、両解釈の選択を読者に委ねているが、果たして本書はどう読み解くことができるだろうか。

2 グローバリゼーションとフリーメーソン

この論文集の共通の歴史的背景として指摘できるのが、グローバリゼーションである。著者自身が明言しているわけではないが、本書には近代日本における三つのグローバリゼーションが見てとれる。第一は幕末のグローバリゼーションである。江戸時代が進むにつれて市場社会化が進展し、さらには開国・交易という課題が浮上してくる。このような状況によりよく対応したのは、意外なことに朱子学的な公共観念を中核に自らの思想を形成した横井小楠であった。伝統的思想を大胆に再解釈することで、むしろ新たな時代に向き合った思想家として小楠を描く著者は、同じような思想的背景をもちながら、置かれた時代状況と立場の違いゆえに、むしろ文明開化に背を向けた元田とのコントラ

ストを鮮やかに描き出す。

第二のグローバリゼーションは、著者がいうところの「大正グローバリゼーション」である。20世紀初頭、交通の拡大を背景に、世界は早期のグローバリゼーションを経験する。日本もまた世界大戦中の好景気によって、東京や大阪など都市中心ではあるが、萌芽的な大衆社会の出現の時期を迎える。このような大正グローバリゼーションを積極的に評価したのが吉野作造であった。彼は、宗教・学問・芸術・経済などが世界大の交通網によって交流を拡大し、人々の精神がより開かれたものになることを肯定するとともに、徳川末期以来のいわば「日本開国史」を自らの研究課題とした。

ここで興味深いのは、著者が吉野のフリーメーソンリー論を検討している点である。社交と友愛を目的とする団体とはいえ、その閉鎖性や秘密主義によって外部からの警戒や疑惑を呼んだこの結社活動について、日本においてもこの時期にすでに、グローバリズムへの反感を背景に、陰謀的解釈が登場する。和辻哲郎ですら一面においてこの種の陰謀説に感化されたのに対し、吉野がこれを一蹴したことが注目される。吉野にとって、グローバリゼーションの時代にこそ、超国家的な集団の活動はますます意味をもったのである。

第三のグローバリゼーションは「大東亜共栄圏」である。植民地の拡大を進め、広域秩序の確立を進めたこの時期の日本にあって、知識人が示した多様な知的対応を著者は描き出す。まず戦後社会において新憲法を擁護する「戦後民主主義」の論客として活躍した中村哲は、戦前の台北大学教授時代に現地の文化を尊重する独自の植民地政策論を、そして戦後も天皇の本質を古代ながらの祭祀君主に見る王権論を展開していた。これに対し南原繁らは、広域圏理論に対抗すべく、むしろ国民国家という単位の新たな基礎づけを目指し、これが戦後の自生的なナショナリズム擁護論につながっていく。戦後だけでは見えてこない思想的背景が、この時期を射程に入れることで見えてくるだろう。

3 感情の政治学～ナショナリズムと怨望

本書を通じて著者が追跡するもう一つのテーマは、いわば感情の政治学とでもいうべきものである。このことがもっとも鮮明に現れるのは、巻頭のナショナリズム論である。著者は、日本のナショナリズムが、比較的新しく創られた伝統であるという議論が、すでに吉野作造において見られることを紹介する。が、著者のこだわりは、それでもなお「烈しい感情」であるナショナリズムがどこから生まれてくるかを探ろうとする点にある。この問題意識の延長線上に著者は、ナショナリズムを「健全なもの」と「不健全なもの」に分ける二分法を乗り越え、普遍性と特殊性、「魅力」と「毒素」をともに抱えたものとして「飼い慣らす」必要を説く。

ナショナリズムの両義性が典型的にうかがえるのが南原繁であろう。カントに学び、国際平和を人類永遠の理想として説いた南原は、同時にあくまで民族の共同性にこだわり、「日本の独自の伝統に対する賛美」を惜しまなかった。南原は一方でナチズム的な「血の純粋性」の神話を批判したが、他方で普遍的な理性と正義に支えられた民族共同体の実現を理想とし、さらには、それを導く存在として天皇を位置づけたのである。「南原にとって戦後デモクラシーの時代とは、そのような天皇と日本国民の精神革命、『昭和維新』のときにほかならなかった」(98頁)という著者の言葉が、重い問いを投げかける。

多様な天皇論の紹介もまた、本書の特色をなす。著者によれば、丸山は、久野収が展開した教育制度をめぐる「顕教」と「密教」の区分論について、微妙な違和感を表明したという。この違和感の中には、皇室をめぐる一般の人々の意識のとらえがたさが含まれているというのが、本書の提示する仮説である。一般庶民のあいだに広まった皇室への敬愛を、単に国家による「顕教」が植えつけたものと簡単にわりきれるのか、さらには、戦後、天皇は「現人神」から親しみやすい「スター」へと変質したのは確か

だとしても、この図式ではすくいきれない、人々の心情のより深い部分があるのではないか。本書は次々に問いを投げかけた上で、90年代における天皇意識の変質を探る。

「感情の政治学」という視点から見逃せないのが、福沢諭吉の「怨望」を論じた考察である。興味深いことに、日本人が西洋思想の受容を始め、「文明開化」にむけた歩みにふみだしたころ、福沢は人間の羨望（envy）に着目し、これを「怨望」と呼んで独自の考察を展開している。福沢によれば、明治維新を準備したのは「門閥専制」への不満だったが、維新後も少数の藩閥官僚が政権を独占したため、排除された不平士族の「怨望」が、彼らを武装反乱へと促した。これに対し福沢は、情念の噴出を政治的・社会的コミュニケーションの拡大によって、さらには国会の早期化節や議院内閣制によって、抑制していこうとしたという。福沢の思想の中に感情の政治学が存在した点が興味深い。

4 本書の意義と残された問い

このように本書は、近代日本の歴史の中に繰り返し現れたグローバリゼーションの時代に、思想家たちがどのように向き合ったかを明らかにする。しかしながら、著者の問題意識は、単に彼らがグローバリゼーションを受け入れたか、あるいは拒絶したかという点にはない。あるいは、どの思想家がよりコスモポリタンで、どの思想家がよりナショナリスティックか、ということが問題なのでもない。本書が模索するのは、そのような変動の時代にあって、彼らの中にある普遍性と特殊性への志向がどのように葛藤したか、あるいは統合されたかということである。さらに、そのような葛藤や統合を支える根底にあった情念がどのようなものであったかを検討することである。そのような情念はときとして猛威を振るうが、それを善悪の問題として裁くのではなく、いかに「飼い慣らす」かを考え続ける点に、本書の最大の特徴があると言えるだろう。逆に、本書を通じて、この課題に対する一義的な答えが示されているわけではない。新たなグローバリゼーションの時代を生きる我々に残された問いであろう。